

## 金門島 -- 中国と台湾のかつての前哨戦の地（フォトエッセイ）

著者	松本 はる香
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	217
ページ	29-32
発行年	2013-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003610">http://hdl.handle.net/2344/00003610</a>

# 金門島

—中国と台湾のかつての前哨戦の地—



写真・文 松本はる香  
Haruka Matsumoto

中国大陸のアモイ（廈門）から台湾の金門島へフェリーで渡る。かつて中国と台湾の間の直接通航は長年禁じられていて、海峡兩岸を往来する際には、香港などの第三の地を経由する必要があった。しかし、二〇〇一年に民進党の陳水扁政権下で「小三通」（通航・通商・通信の限定的解禁）が開始されて以来、中国人と台湾人の限定的な通航が認められるようになった。さらに、二〇〇八年の国民党の馬英九政権の発足以降、第三国の外国人の船によ

る通航も認められるようになった。金門島とは大金門島、小金門島をはじめとする、大小一二から成る島嶼の総称である。地図上でみればわかるとおり、台湾島から西に約二七〇キロ離れたところに位置するが、中国本土からはわずかに数キロしか離れていない。アモイの港からフェリーで行くこと約二〇分で、中華民国の領海に入る。フェリー内は中国人観光客で溢れかえっている。その日は激しい雨が降っ



敵方の上陸を阻止するために海岸線に沿って埋め込まれた無数の鉄の杭「軌條岩」





アモイの海岸線にある「1国2制度による中国統一」の巨大な看板



小金門島行きのフェリー内—兵役中の若い兵士の姿もある

翌朝、大金門島からさらに小さなフェリーに乗船してわずか十数分、小金門島に渡る。小金門島の史跡、仙姑烈女廟を訪れていた時のことであった。「ドーン、ドーン、ドーン」と打ち上げ花火が至近距離で炸裂したような大きな音が背後でした。驚いて振り向くと「ディーレイ！ ディーレイ！」という地元民の叫び声が聞こえた。突然のこととて、一瞬意味が理解できなかったが、この耳慣れない「ディーレイ」とは、中国語で「地雷」という意味であった。近所で露天を営む土産物屋の店主が、廟のすぐそばで地雷の撤去作業が行われていると教えてくれた。

冷戦時代の初期、蒋介石政権は国共内戦に敗れて、中華民国を台湾へ遷都した後、金門島を毛沢東政権との前哨戦の地と位置づけた。それ以降、アモ

ていたため、船の窓からみえる小さな島に掲げられた「三民主義統一中国」（三民主義による中国統一）のスローガンの看板文字は霞んで薄っすらとしか読み取ることができない。金門島へ渡る直前に、対岸のアモイの海岸に設置されていた「一国両制統一中国」（一国二制度による中国統一）の巨大な看板を目にしたばかりだったためか、非常に印象的に映った。およそ一時間余りで金門島の水頭埠頭に到着した後、中華民国の入国検査を受ける。ここが中国から台湾への事実上の入り口だ。



観光用に置かれた戦車—対岸に薄っすらと見えるのはアモイの街だ



共産党軍の迫害から逃れて自ら海に身を投げた女性を祀る仙姑烈女廟





馬山観測所に掲げられていたスローガン  
—「還我河山」(われらの国土を返せ)



地下坑道のなかの様子—その先は海に繋がっている

いに隣接する金門島は「大陸反攻」の軍事的基地として要塞の役割を果たすようになった。これに対して、中国の人民解放軍が、一九五四〜五五年と一九五八年の二度にわたって金門島等に向けて砲撃を行った。これが第一次・第二次台湾海峡危機の戦場としてよく知られている金門島の一面である。

当時、金門島には、人民解放軍の上陸作戦を文字どおり水際で食い止めるために、海岸線に幾重にもわたって地雷が埋め込まれた。とりわけ、中国大陆と隣接する小金門島の海岸線が大規模な地雷原となった。近年、中国と台湾の緊張緩和によって、金門島に埋められている地雷の撤去作業が続けられているが、作業は思いのほか難航しているようだ。

金門島は島全体が要塞ようになっており、至るところに戦時中に作られた巨大な地下坑道や防空壕等の戦跡が残っている。大金門島の南西部にある翟山坑道は、海に繋がる巨大な地下運河のような構造をしており、小型船舶や上陸艇の基地の役割を果たした。また、島の最北端にある馬山観測所には、中国大陆の監視や宣伝工作活動が行われた当時の様子が現在も残されている。

さらに、金門島の海岸線に沿って、黒い鉄の杭のようなものが無数に埋め込まれていた。これは、中国の人民解放軍の上陸作戦を阻止するためのいわば防衛柵であり、敵方の船が接岸できないように工夫が凝らされた。

しかし、そのような緊



海に向かって造られた小さな石の要塞に大砲が置かれている



馬山観測所の長い地下道





金門島の守り神の風獅爺—沖縄のシーサーにも似ている



写真撮影をする花嫁たちの平和な風景—その奥に見えるのは石の要塞の跡だ



地元で有名な包丁屋の工房—中国から撃ち込まれた砲弾の破片を用いて包丁を作る



民俗村に再現された福建風の伝統的な建物

まつもと はるか／アジア経済研究所 東アジア研究グループ 副主任研究員

主著に“The First Taiwan Strait Crisis and China’s ‘Border’ Dispute around Taiwan” (Eurasia Border Review, 2012)、「海峡兩岸對話の再開と平和協定の将来像—攻勢を強める中国と選択肢の狭まる台湾」(『中国 21』Vol.36、2012 年)等。

「将来の金門とアモイは和解の門、平和の門、協力の門になる」二〇〇八年八月下旬、台湾の総統の馬英九は、第二次台湾海峡危機五〇周年式典で演説した。実際に、国民党が政権復権して以降、本格的な「三通」（通航・通商・通信）が解禁されて、経済面における兩岸交流が急速に進んでいる。また、

た、二〇一二年から一三年にかけて、中国では胡錦濤から習近平へと政権が移行した。台湾との関係が深い福建省での、習近平の若い頃の実務経験を踏まえて、今後、兩岸関係が何らかの形で動くのではないかとといった憶測も飛び交っている。最近では、金門とアモイの間に橋を架ける構想や、水不足の金門島に向けて、中国大陸から水を供給するといった計画が実現に向けて動き始めている。

このような金門島をめぐる一連の動きが、中国と台湾の和解の象徴となるのか、或いは、単に中国共産党政府による統一工作の延長線にあるものなのか——その本質を見極めるためにも、いましばらくはこの小さな島をめぐる動きから目が離せない。